

人生の最終章だからこそ最高の華やぎを

エピローグサロン光の庭

# 最期の瞬間に身にまとう装いで、 慈しみと愛おしみを

晴れの日も雨の日も、笑顔の日も涙の日も、私たちは自分で選んだ服に袖を通し、その日その日を自分らしく装ってきた。そんな人生の荒波を生き抜いた果てに、自分の肉体が最期に身にまとう服は、親しい人たちにお別れを告げる瞬間を演出する極上のものであって欲しい。エピローグドレスという新発想。

エピローグドレスを通じて人生の最終章に向き合う。そんな提言をしてゐる「エ

ピローグサロン光の庭」を横浜に訪ねた。窓の外は緑溢れる横浜公園、目を転じれば神奈川県庁の向こうに海。高い天井の解放感ある室内には、港町の暖かな陽射しが降り注ぎ、穏やかな時間が流れていた。

エピローグドレス。耳慣れないかもしれないが、いわゆる「死に装束」。「一番最後に自分の肉体が身にまとう服、大切な人たちが自分に別れを告げる瞬間に身にまとう服です」と、サロンを主宰する杉下由美さんは言う。「だからこそ、特に女性にとってはウェディングドレスと

同じくらい、あるいはもっと大切なものではないでしょうか」

お別れの瞬間、遺された人たちが最後に目に焼き付ける自分の姿。この衣裳の大切さに杉下さんが気付いたのは、親しい友人のご主人の葬儀だった。働き盛りの46歳、ガンが見つかってわずか2カ月で急逝した彼の葬儀に駆け付けた杉下さんは、野球のユニフォームを着た棺の中の故人と対面した。「彼の姿を見た瞬間、取締役として仕事で敏腕をふるいつつも、野球をこよなく愛していた彼の人生が、私の中にうわーっと飛び込んだんです。彼らしい最期の姿は、私の中に温か

な記憶としてずっと残るだろうと感じました」。その時の体験が、杉下さんに新たな気付きをもたらした。「誰にも必ず訪れる最期の時に身にまとうものは、とても大切な意味を持っている」と。

人生のフィナーレに  
ふさわしい華やぎ



背中ファスナータイプのドレス。生地やレースは好きな素材を選べる。「シックなベージュの生地やキャサリン妃が使っていたレースなども人気」（杉下さん）。プーケやオートクチュール刺繍が顔周りを彩る



杉下さんは、人々の「装い」を創作し続けて来た、30年のキャリアを持つファッションデザイナーである。アパレルを退社し自らの会社を起業した後は、一流企業の制服や展示会コスチュームなど、仕事の目的に応じたデザイン、着る人の魅力や空間の雰囲気を作り出すようなデザインを多く手がけてきた。その杉下さんが、数々の仕事をこなしつつたどり着いたのが、人生最大のハレの日の装い、「エピローグドレス」である。「私は、エンディングという言い方に少し違和感があつてエピローグと呼んでいます。精一杯生きた人生の集大成の時間、そして最期のお別れまで含めて人生の最終章「エピローグ」だと考えています」

杉下さんがプロデュース



こちらはすっぽりとくみ込むみ込みタイプ。ふんわりと厚みのある柔らかな生地はラインを際立たせすぎることなく優しく身体を包み込む。美しいレースをあしらったブーツは「歩くことはなく実用性は問わないですから、自由な発想で美しさやご家族がはかせてあげやすい形などの理想をとことん追求できました」（杉下さん）

## エンディング ドレス

したエピソードドレスには、柔らかなシルク様のレースがふんだんにあしらわれ、人生のフィナーレにふさわしい華やぎに満ちていた。装花やインポートレースなど好みに応じて一緒にデザインしてもらえらえる。また、死に装束ならではの工夫が至る所にほどこされている。闘病の後のやつれ、器官切開の喉の傷なども、小さな帽子にあしらわれたレースや、襟元のドレープなどがカバーする。納棺師に頼まずとも、自分たちでも着せられるよう、ゆったりとした袖口や背中の方アスナーなどに工夫を凝らす。袖口や布ブーツについたリボンは、子どもや孫たちがそれぞれの手で結んであげられる仕様に。「みんなで美しい故人を囲んで、」お母さん、綺麗だね」とか「このレースが気に入っていたね」などと話しながらリボンを結んであげる。遺された子どもや孫が小さい場合は特に、こうしたお別れの時間こそ、喪失感を乗り越えるためのグリーフケアではないかと思うのです」

着る人の魅力をいつでも最大限引き出す。よき場をつくり出す。たとえそれが、二度と歩く事のない横たわった故人であっても。華やかに横たわり、最期のお別れを告げる場をつくり出す、「装い」の力。

杉下さんのプロフェッショナルな矜持と着る人への愛情を感じる細やかな完成度である。最初からデザインするフルオーダー、決まったデザインをベースに生地の色やレースなどをセレクトするセミオーダーメイド、または既製品など、それぞれ対応可能だという。

### 楽しみながら最終章に向き合える 情報ステーションに

「遺言」「財産整理」「お墓」「葬儀」「介護」……人生の終末期仕度に、いつかは必ず向き合わねばならない。子どもに迷惑をかけたくない。自分一人で生きていくけれど老後や最期は心配。でも何から準備を始めればいいのかわからない……

ここは人生の最期を40代50代からライフプランとして捉え考えていくことができるところとしても機能している。ドレスを一緒にデザインしながら30年後の自分の準備をして生きていく。こんなブーケを帽子にあしらったらどうだろう。思い出の生地を、ドレスの襟元に縫い込めなにかしら。最終章に、楽しみながら向き合う時間。

「最期の装いを楽しく考える事が、エピソード

ログに向き合うきっかけになったらと願っているんです。そんな和やかな気持ちで人生の最終章をもに考えられるようなサロンにしていきたいですね」と杉下さん。「今はインターネットで情報が簡単に集まりますが、私の年代でもネットになじみのない方も多い。でも、ここに来ればドレスづくりを楽しみつつ、情報も収集できる。そして介護をはじめ成年後見の制度や遺言、相続、葬儀の事など、身仕舞いに関するいろいろな心配事をプロとしてフォローしてくれる専門家につないでいくこともできます。人生の最終章の情報ステーションにしていきたいのです」

エピソードサロン光の庭。文字通り、終末までの「生き方」への希望の光に満ちた庭のような空間だと感じた。



●杉下由美さん。ファッションデザイナーとしてユニフォームやコスチュームデザインを手がける。2013年6月、エピソードサロン光の庭を立ち上げた。世話好きで人が好き